「夢中になって生きる」

学校長　笠　原　　究

校長として附属小学校に赴任してからあっという間に一年が過ぎ，年度末の3月を迎えました。この一年間，子供たちが授業，行事，遊びに取り組んでいる姿を見てきました。そうした姿を見るたびに清々しい気持ちになるのは，附属小の子供たちが何にでも夢中になって取り組んでいるからです。授業で一所懸命に手を挙げる姿，心を込めて発表する姿，全力で鬼ごっこをする姿などに感銘を受けてきました。この感動は，素晴らしいスポーツの試合を観たときや，美しい音楽の演奏を聴いたときに通じるものがあります。優れたスポーツ選手や演奏者もまた，一心に夢中になって自らの仕事に取り組んでいるからでしょう。

6年生はこの春で小学校を卒業し，中学校へと進学します。中学校へ進んでも，小学校で夢中になって取り組んだ経験を忘れないでいてほしいと願っています。もちろん思春期に入ると，自分を見つめるもう一人の自分が出現し，客観的に自分を捉えようとします。他者と自分を比較し，自分を取るに足りないものだと考えてしまうこともあるかもしれません。このように自分を外から眺めるメタ認知は，成長する上では欠かせないものです。その中で自己懐疑に陥ることもあるでしょう。しかし，最終的にはこの自己懐疑を乗り越え，長所も短所もひっくるめて自分を受け入れることが，幸せに生きるために欠かせないことです。言い換えると，いろいろ悩んだけれど小学校の時のあの夢中だった自分に戻る，ということになるでしょうか。

教員になったばかりの頃，私は灰谷健次郎さんという作家に大きな影響を受けました。この作家は，もともと小学校の教員だったのですが，現実に絶望し教員をやめ，沖縄に移り住んだ人です。そこで沖縄の人々の優しさに触れ，『兎の眼』，『太陽の子』など，子供を主人公とした作品を発表していきます。彼の作品に一貫してあったメッセージは，「子供こそ人間の本来あるべき姿だ」というものでした。今還暦に近付いて，このメッセージを改めて噛みしめるようになっています。小学生のように夢中になっていることこそが，幸せなのです。夢中になっていれば，他人の目を気にすることも，失敗を恐れることもありません。

もちろん大人になってお金を稼がなければならないということになると，嫌でもやらなければならないことが出てきます。しかし，小さなことでも夢中になって喜ぶことができたあの子供の頃の気持ちを忘れなければ，幸せになるハードルはぐっと下がります。いろいろなことに感謝の気持ちがもてるようになります。附属小の子供たちには，ぜひ幸せな大人になってもらいたいのです。そのために，ここで「夢中になった記憶」をいつまでももち続けてほしいと願っています。